

児童文学に見る子ども像 ― もじゃもじゃの系譜 ―

平成 18 年 4 月 22 日

講師：本田和子氏（前お茶の水女子大学学長）

会場：国際子ども図書館 3 階ホール

皆様、こんにちは。本田和子^{ほんだますこ}です。私は、「和子」と書きまして「ますこ」と読みます。大変不思議な読み方をしますので、たいていの方が覚えてくださいますから、その意味では幸いな名前であったかなと思います。皆様の中にはもしかしたら、ご記憶の方がおいでかと思いますが、昨年までは、「お茶の水女子大学の本田です」と挨拶していました。けれども、今は、「フリーターの本田です」と申し上げることにしています。特にどこかに所属するということをしませんので、少し自由な生活を取り戻して今楽しんでます。

本日の講演の演題も、久しぶりに児童文学の話をさせていただけるので、ちょっとうれしいような、心配のような気持ちでした。と申しますのは、先ほどのご紹介のようにこの 4 年間、学長職などについていて、しかも国立大学が国立大学法人に変わるという、大変な時代だったものですから、毎日毎日規則の作り直しをしたり、教職員代表と交渉をしたりと本当に殺風景な暮らしをしていました。やっと自由を取り戻しましたから、これからまた子どもの本なども紐解いてみようかと思った矢先にこういうお話がありまして、ちょっと喜びながら引き受けさせていただきました。

I 始まりは「もじゃもじゃペーター」

今日は「児童文学の中の子ども像 ― もじゃもじゃをめぐる ―」というテーマでお話しいたします。ここにお集まりの方は児童文学に関心の深い方が多いと思いますから、子どもの本のことはよくご存知でしょう。子どもの本の中には魅力的な子どもの主人公がたくさん登場します。だいたい前に岩波書店でしたでしょうか、「あなたの記憶に残っている子どもの本を 1 冊挙げなさい」という特集をしたことがあります。そのときにみなさんがそれぞれ 1 冊ずつ挙げました。私が大変びっくりしたのは、あの、フェミニストのジェンダー論者で、東大教授の上野千鶴子さんがなんと『星の王子さま』を挙げられていました。そして、「私はこの本に幾度となく慰められた」というコメントが付いていて、みんなでびっくりさせられたことがありました。1 人 1 人がそれぞれに魅力的な作品を挙げられていたのですが、みんな自分の大切な子どもの本をそれぞれの心のポケットの中にしまっているようです。

今日は、その中から、「もじゃもじゃ」を取り出してみました。と申しますのは、ご存知のようにこの図書館で、「もじゃもじゃペーターとドイツの子どもの本」という特別企画の

展示がなされています。ご覧になった方が多いと思いますけれども、展示には、「初代もじゃもじゃペーター」だけではなくて、各国語に訳されたもの、あるいは『もじゃもじゃペーター』の末裔とでもいうような子どもの主人公の出てくる本なども並んでいまして、『もじゃもじゃペーター』の広がりに関心させられました。そこで、今日はその、「もじゃもじゃ」を取り上げて少し考えてみようと思います。

『もじゃもじゃペーター』というのは、展示をご覧になった方はもちろんですが、展示をご覧にならなくても、児童文学に造詣の深い方だったら、だいたいご存知のキャラクターです。そして、「ドイツの児童文学史の最初を飾る」などと言われています。1844年に、ハインリヒ・ホフマンという精神科医が自分のお子さんのために書いた本です。クリスマスプレゼントに書いたものが最初であるというエピソードが残っていますが、ホフマン博士の子どもたちだけではなくて、いろいろな子どもがそれを熱中して読んだために、印刷本として世界中に広がっていきました。『もじゃもじゃペーター』については改めてご紹介する必要もないと思いますけれども、とりあえず、今こちらの図書館にあります『もじゃもじゃペーター』を一冊お借りいたしました。この表紙の絵をご覧になるとわかりますように、髪の毛がめちゃくちゃにのびていて、顔が見えないくらいに乱れています。中には、もじゃもじゃペーターの髪の毛があんまりすごく広がっていて、鳥が巣を作っているという挿絵が描かれているものもあります。とにかく生まれてから一度も櫛をいれたことがないらしい、もしかしたらシャンプーもしていないじゃないかと思われるくらい、もつれた髪の毛のペーターが物語を繰り広げます。

この本の中には、『もじゃもじゃペーター』のストーリーだけが一貫して収められているわけではないので、いろんな話が細切れに入っています。たとえばスープが嫌いで「いやだ、いやだ」と言ってスープを飲まないためにどんどん痩せてしまって、最後には死んでしまってお墓に入ってしまう子どもの話とか、指しゃぶりをやめないために大きな穴で親指をチョコキンと切られてしまう子どもの話とか、いろいろな話が出てきます。従って、20世紀の半ばを過ぎた児童文学の世界ではあまりよい評価を与えられませんでした。皆さんの中にも子どもの本に携わった方たちは、『もじゃもじゃペーター』なんて」といった時期があったことを記憶しておいでかもしれません。「あんなにすごいしつけ主義の本、大人のしつけがもろに前面に出ているじゃないか」、「あんなに残酷な形で指をちょん切っちゃったりして血が出ているような絵なんか見せたら、子どもが怯えるじゃないか、あれはまさに子どもを脅迫している本である」、といった評価がされた時代がありました。面白いことに子どもの本の評価は時代を反映します。20世紀の半ばは、児童中心主義といいますが、子どもの本というのは子どもの目線で、子どもの世界を楽しく描かなければならない。子どもが楽しんで読む本が、よい児童書であるという考え方が一般を支配するようになりました。その目で見ますと、大人が「しつけ」というものに大きな価値を置き、強いプリンシプルを持って子どもを押さえつけてしまうような物語はあまり結構ではない、絵も露骨過ぎる、ということになったと思います。こういう問題はちょっと置きまして、当時も、

そしてその後も、ペーターの本がたくさんの子どもたちに愛読されたことは確かなようです。だから世界中に広がっていったのだと思います。おそらく、「いくらなんだってこんなに凄くないよね」とか、鳥が巣を作っているような絵を見て「髪の毛に鳥が巣を作る、そんなことってないよね」とかいいながら子どもたちは、くすくすしのび笑いをして楽しんでんじゃないでしょうか。それから、スープを飲まないでどんどん痩せていって糸のようになってしまう子どもの絵を見ながら、「本当かな。いくらなんだってこんなことないよね。でも死んじゃうのかな」と少し恐ろしく思った子どももいて、様々だったと思います。指しゃぶりをやめられなくて、ふやけた自分の爪を見ながら、「こんなことしていると指を切られちゃうのかな」と思って、指しゃぶりをやめようと思った子どももいるし、「まさか、うちのパパやママは僕の指、鋏で切るなんてことしないだろう」と、指しゃぶりをやめられなかった子どももいるだろうと思います。

私も実は、好き嫌いの多い子どもでした。お魚嫌い、お肉嫌いでした。なぜか緑色の菜っ葉のお漬物が好きで、からし菜とか野沢菜のお漬物が大好きという変な子どもでした。母は大変心配して、「そんなのばっかり食べていると、顔が緑色になって死んじゃうわよ」と言って、ホフマン博士と同じように子どもを脅かしたのです。私は時々ずっと鏡を見ては、「まだ緑色にならないから大丈夫だ」と思って、お肉もお魚も拒み続けて暮らしました。ですから、背が伸びなくて小さいのはそのせいかなと思ったりします。同じ姉弟でも弟は、母に脅かされると怯えて言うことを聞く子どもでした。母が、「男の子なのだから、骨がしっかりしなきゃいけない。小魚を丸ごとかじって食べるといい」と言って、小さい鰯を唐揚げにします。弟はとてもそれを嫌がるのです。ところが母は正面に座って、「お母様も食べるから、あなたも召し上がれ。あなたが食べなかったら、お母様は毎日こればかり食べますよ」と言って、食べてみせるのです。弟は涙をぼろぼろこぼしながらそれをかじるのです。ですから、同じような脅かし、大人の強いしつけにあっても、自分でそれを拒む子どももいれば、それに従って直してしまう子どももいて様々だなと思います。

ただ、私は子ども時代を戦争の中で過ごしました。そうしますと、食べ物がなくなります。食べ物がなくなりましたら、好き嫌いなんか言っていられないのです。魚でもたまにお目にかかると感激して食べてしまいます。なので、好き嫌いは戦争のお陰ですっかりなくなっていました。背は伸びませんでした。健康に育ちました。私が時々、母を捕まえて、「お母様、あんなに一生懸命しつけをしようとして無駄だったわね」と言いますと、母は情けなさそうな顔をして、「一生懸命にやったのに、子どもって思うようにならないものよね」と言っていました。ですから、おそらく19世紀の子どもたちも、ホフマン博士の絵本を見て怯える子どももいて、「明日からスープを飲もう」と思う子どももいた反面、「そんなこと言ったって」とにやにやしている子どももいたことと思います。

でも、大勢の子どもにこの本が愛されたということは確からしい。じゃあなぜ愛されたのだろうということを考えてみようと思います。「もじゃもじゃ」というのは描かれた絵としては髪の毛がもじゃもじゃになっているということです。髪の毛がもじゃもじゃだと

ぜそんなにいけないのだろう、大人はなぜそんなに困るのだろう。不潔で虱しらみが湧いたりすれば、ちょっと困るかもしれません。虱なんていうのも戦後に育った方はご存じない虫です。戦争中とか、戦争直後を少し経験された方はご存知かもしれません。不潔にしていると髪に毛虱という小さな虫がくっついて、大変痒いのです。ですから、大人たちは、「そんなに汚い頭をしていると、虱が湧きますよ」と言って、シャンプーをさせられたのです。そういうことがあるにしても、子どもが少し痒いのを我慢すればあんまり困らない。それから虱が湧くのだったら、髪をシャンプーだけしておけばよくて、切らなくてもいいじゃないかという理屈も成り立ちます。

なぜ、そんなにもじゃもじゃ頭をしていると大人から嫌がられるのかということは、子どもには良くわかりません。それから、指をしゃぶっているとなぜそんなにいけないのか、これも子どもには良くわかりません。好き嫌いだって、「スープは嫌だけど、他のものを食べればいいじゃないか」と言えるかもしれません。大人たちが嫌がるけれど、子どもの方ではどうしていけないの、ということは、考えてみると世の中にたくさんあります。大人のルールから言うとルール違反です。それから大人の美意識から言うと、汚いこと、醜いことです。でも、当事者にとってはなんでもないことで、大人と子どもの間にはしばしば葛藤が起こったりします。「これがいいことですよ」と言っても、ちっとも言うことを聞いてくれない。そして、なんの勘のと言って逃げ回ったり、時には反抗したりする。子どもというのは本当に厄介なものだという感想を持っている方もたくさんおいでかと思えます。

ただし、最近の子どもは少し利口になりすぎてしまって、あんまり反抗なんかしないし、子どもも大人と一緒に清潔好きになってしまって、髪を切ったり、シャンプーしたりするのがあまり嫌いではなくなっていましたから、髪を毛をきっかけにして、大人と子どもが相せめぎあう、戦いを仕掛けることはあまりなくなりました。これも大きな時代の変化で、このことの意味も後でちょっと考えてみようと思います。いずれにしても髪がもじゃもじゃであったり、指をなめたり、子どもにとってはなんでもないことが大人にとっては許せないことです。こういう形で、大人と子どもの間に葛藤が起きます。ペーターはまさに子ども側の代表です。大勢の子どもたちが密かにペーターを愛したというのはわかる気がします。

そして、面白いことに百数十年経ってから、1969年に、日本で「ペーターの妹」が生まれました。福音館書店から『いやだいやだの絵本』という小さな絵本が出ました。その中から、せなけいこさんがお書きになった、『もじゃ もじゃ』を持ってきました。髪がもじゃもじゃに広がっている女の子のお話です。簡単な本ですので、全部お見せします。「もじゃ もじゃ / もじゃ もじゃ はなあに？ / おにわの き / うちの ころ / ほどけた けいと / もっと もっと すごい ルルちゃんの あたま」。ルルちゃんは口をへの字に結んで「大人の言うことなんか聞くものか」という顔をしています。「うえきやさんが ちょき ちょき / ころも ちょき ちょき / けいとは まき

ましょう / ルルちゃんは？ / やっぱり ちょき ちょき」と、「かがみに うつ
った きれいなこ だあれ？」。

もじゃもじゃ頭で反抗することをやめて、口をへの字に結んで、「髪の毛なんか切ってやるものか」という顔をしていたルルちゃんが、髪をちょきちょきさせた途端に、とても良い子に変わってしまっている例です。まさに、『もじゃもじゃペーター』の正当な末裔です。ですから、中にはこの絵本を嫌う方もいました。大人のしつけの意図がものすごく出ていて、「大人が結局勝利してしまう絵本じゃないか」、「子ども側の主張が全く抹殺されているじゃないか」と、あまり高い評価を与えなかった方もいます。反対に、「これはとても良い本である。家の子が床屋さんを嫌ってしょうがないが、これの御蔭で、ルルちゃんと同じようにちょきちょきしましょうと言うと、ちゃんと床屋さんに行つて髪をきれいに切るようになった。これは大変役立つ本である」と評価される方もありました。この評価の受け方も『もじゃもじゃペーター』と同じです。このタイプの本はペーター以後もたくさん出版されました。

II 「もじゃもじゃ」が単なる「いたずらっこ」を越えるとき ——『ハイジ』と『モモ』と『日本神話』を挙げて——

ところが、面白いことに、「もじゃもじゃ」が単なる大人を困らせるいたずらっ子ではなく、もっと別な意味を託されて物語世界で登場し始める時代がやってきます。いくつか例を挙げてお話いたします。レジュメのIIに、「もじゃもじゃが単なる「いたずらっこ」を越えるとき」というタイトルをつけています。「もじゃもじゃ」の頭は、大人のしつけを拒む象徴でもある。しかし、その「もじゃもじゃ」が単なるいたずらっ子の域を越えてそれ以上の意味を託されるとすれば……。近代化の進むドイツにあつて、文明ゆへの病を癒した自然の力を謳い上げた『ハイジ』の物語や、スピードと効率を価値とする現代社会を、崩壊から救った『モモ』の物語を、この流れに位置付けて読み直してみよう」と書いておきました。『ハイジ』は皆さんよくご存知かと思います。アニメにもなっていますから、物語よりもアニメに親しんだという方もいるかと思います。アニメに出てくる『ハイジ』は髪の毛は短く切つてあります。『ハイジ』はヨハンナ・シュペーリという女流作家が、1880年から81年にかけて作った物語です。それによりますと、ハイジは短くてくしゃくしゃな髪の毛の女の子と書かれています。ですからアニメに出てくるハイジよりも髪の毛がもっとくしゃくしゃだったろうと思います。そしてこの子は、髪の毛が短くて、くしゃくしゃで短いスカートからよつきりと短い足をだしているという、元気な女の子として書かれます。これは、1880年から81年にかけての作品ですから、その時代にこういう女の子はどういう意味を持ったかという、良家のお嬢様ではないという位置付けです。この時代はヴィクトリア主義の女子教育が主流の時代です。ヴィクトリア朝時代はいろいろ変わった文化を生み出していますが、女子教育にもヴィクトリア主義が出現して、非常に特色のある女子教育が展開されました。それは、当時女学校に通う人たちは皆良家の娘ですから、

貴婦人になるために厳しいしつけを受けるのです。髪は長くとかしていなければいけない、スカートの丈は長く、膝下でなければならない、言葉遣い、態度、行儀、それから性に関わることは禁句で絶対口にしてはいけないし、目に触れさせてもいけないという女子教育でした。日本にもヴィクトリア主義の女子教育の流れを受けたカトリックの女学校では、こういう教育をしたようです。1960年くらいからさすがに校則が変わって、そういう女学校も少しオープンになったようです。私の知り合いの娘さんが戦後まもなくその種の女学校の寄宿舎に入り、ストッキングは黒の木綿のものを履かなくてはならないことでとても嘆いていました。そのころ少しナイロンのストッキングが出始めていた時代なので、木綿のストッキングを買うためには横浜へ行かなければならなかったようです。それから、貴婦人はそういうことをしないということで、ハンカチーフも下着も自分で洗ってはいけません。そういうことは、雑用をするシスターが全部部屋を回って歩いて洗濯物を集め、アイロンをかけて返してくれる。「これはシスターの仕事なので、あなた方はハンカチを洗ってはいけません」と言われて、普通の家庭のしつけを受けたその娘さんは大変困った。家庭にいたときは「自分のものは自分で洗いなさい」、「自分の靴は自分で磨きなさい」という、しつけを受けていたのに、その寮に入ったらそう言われる。「本当になんて変な学校に入ってしまったのだろう」と嘆いていたようです。私はそのとき、「ああ、ヴィクトリア朝時代の貴婦人養成の校風が日本に伝わってきて、まだ生きている学校もあるのだな」と思いました。

そんなわけで、『ハイジ』の時代は、良家の娘たちはそういう教育を受ける時代でした。ところがハイジは、とんでもない女の子なのです。そのとんでもない女の子が彼女のおばさんの策略で、ある大きな都市の裕福な家に住み込むことになり、その家のクララという、体が弱く、車椅子の生活をしているお嬢さんの遊び相手になります。クララのお母さんは亡くなっているので、ロッテンマイアさんという家政婦さんが取り仕切っています。19世紀の終わりくらいの物語に出てくる家政婦さんは大変権威を持っていて、恐い女性が多いようです。クララは、アニメを見ると、髪が長い、ほっそりとした色の白い、綺麗でエレガントなしつけのいいお嬢さんです。ロッテンマイアさんはそういうお嬢さんの友達としては、こんな野育ちの子は相応しくない、なんとか帰してしまいたいと思うけれども、うまく帰せない。そこで、我が家に相応しいようにときびしいしつけを始めるのです。ところがハイジはしつけをしようとしても、のってこない。ハイジのほうも反抗をしているつもりではないのですが、身に備わった野性があふれ出してきてどうもうまくいかない。ハイジの方もだんだん居心地が悪くなり、山に帰りたいたいと思うようになる。ロッテンマイアさんもなんとかしてハイジをしつけたいと思うようになり、葛藤が生じます。

ハイジの唯一の救いは、クララのおばあさんが訪ねてきてしばらく滞在することです。おばあさんは子どものことがよくわかった方です。子どもにはいろいろな子どもがいる。元気があふれんばかりで飛び回る子どももいれば、静かな子どももいる。この子はこんなにあふれんばかりのエネルギーを持っているのだからそれは大切にしよう。しかし、この

子は教会に行ったこともなくて神様のことも何も知らない。だから私がここにいる間は聖書を読んで聞かせて、神様のことを知らせてあげよう。と、おばあさんは考えて、ハイジに聖書を読んで聞かせます。ハイジは、聖書の中の羊飼いの話が、アルプスの山で山羊を飼って楽しんだ思い出と重なり、大変興味を引かれます。そして、「こんな素敵な話を自分で読むには、どうしたらよいのだろう」とおばあさんに問うと、おばあさんは「それは読み書きができるようになるのと、自分でも読めるのですよ」と答えます。そこで勉強の大嫌いだっただけのハイジが読み書きの勉強を始めるようになります。それからお祈りも知らなかったハイジに、おばあさんはお祈りを教えてあげます。そして、「願い事がかなうのだ」と言います。ハイジは一生懸命お祈りをするのですけれども、ある日、「お祈りはやめた」と言い出します。おばあさんが「どうしてやめるの」ときくと、「だっていくらお願いしても神様は聞いてくださらない。たぶん世界中の人がお祈りをするから神様にはいちいち聞こえないのだろう」と答えます。すると、おばあさんは「それは違う。神様はすべての人のお祈りを聞き届けてくれるのだけれど、いつ叶えてくださるかには神様のお気持ち次第なの。あなたが今すぐ叶えて欲しいと思っても、もっと先の方で叶えたほうがいいと思えば先の方で叶えてくださるのよ」と言います。すると、ハイジはまた納得してお祈りを始めます。

おばあさんとの出会いはハイジにとって、良き文明との出会い、ロッテンマイアさんとの出会いは悪しき文明との出会いになります。ロッテンマイアさんがしつけようと思っている「文明化された社会のレディーとしてのしつけ」を、ハイジはまったく受け付けません。ただ、おばあさんが一番大切なこととして教えてくれた読み書きや神を敬うことは、ハイジはうまく取り入れることができ、おばあさんの滞在中は幸せに過ごせました。しかし、おばあさんが帰ってしまうと、ハイジの憂鬱が重なって夢遊病のようになり、結局は山に帰されることになります。ハイジは、山に帰ると元気を取り戻しました。ところが、山に帰って元気を取り戻したのはハイジだけではありませんでした。翌年の夏、クララとクララの主治医が山へやって来ます。クララは重い障害を持ち、主治医は娘を亡くしてから心に非常に深い傷を持っています。そういう人たちがハイジと一緒にアルプスの山の空気を吸い、山の食物を食べ、山の生活をすることによって心が癒されていくのです。クララも歩けるようになります。主治医も心を取り戻し、勇気が湧いてくるのです。それから、ある出来事がきっかけで偏屈になって、村で孤立していたハイジのおじいさんの心まで解けてきて村人と和解し、日曜日には教会に行くようになります。

19世紀の後半からヨーロッパの社会が近代化の波に乗り始めて文明化が進んだ。その結果、自然な生活が蝕まれてしまう。その中で人間も型にはまったものになる。『ハイジ』は、そこにはまりきれなかった自然さながらの子どもが、結局は文明の中で病む人々を癒したという物語になっているのです。そうしますと、ペーターや、ルルちゃんのように「もじゃもじゃ」を大人のしつけによって矯正されてしまうのではなく、逆に、「もじゃもじゃ」が人々を幸せにする物語ということになります。「もじゃもじゃ」の意味が逆転しているのです。これは、「文明」に対して「自然」を対比させて自然の持つ癒しの力をもじゃもじゃ

の『ハイジ』に託した物語と言えましょう。しかし、この物語が J.S という頭文字だけで最初に公表されたとき、『ハイジ — その修行時代と遍歴時代』という題名が付けられていたようです。したがって彼女は、ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』を模して、人間が遍歴と修行を重ねながら成長していく物語を書きたかったようです。ですから、『ハイジ』は1人の少女がそういう経験をしながら成長していく過程を書いたものですから、自然が人々を癒すとか、ハイジに自然の象徴という意味を作家が託したのかどうかはわかりません。けれども、見方によっては「ああ、この時代だからこういうものが意味を持ち始めたのだな」という読み方もできると思います。

都市化の問題が今は深刻です。今、日本全体が都市化されてしまっていますが、不幸なことに過疎の村でも子どもたちは都市的な生活をしているのです。学校が終わると、近所の子もたちと遊び回って、山や野原を駆け回っているかというところでもないのです。というのは、過疎の村では、小学校が廃校になって統廃合されて遠くにあるものですから、親が車で送り迎えするのです。送り迎えされて家に帰った子どもは、近所の子もと群れて遊ぶということができなくなります。従って、大変な田舎でも家の中でテレビを見たり、ゲームをしたりして、都市型生活をしています。秋田県の山奥に行ったら素朴な子どもの生活が残っているだろうと子どもの生活実態を調査しに行ったら、ちょっとがっかりしたという人がいました。秋田の山奥の子どもも、都会の子どもとまったく変わらない生活をしてきたからです。ただ、塾が近くにないから行かないくらいです。これが今、日本の子どもたちにとっては非常に大きな問題になっています。そういうことに対して、19世紀の後半、子どもの成長に及ぼす「都市化」という問題が少しずつ見え始めた時に、子どもの持っている野生を見直した作品が生まれてきても不思議ではないだろうと思います。

「もじゃもじゃ」が単なる大人の困り者ではなく、むしろ大人を幸せにする力を持った存在として描かれた典型的な物語がミヒャエル・エンデの『モモ』でしょう。『モモ』も髪がくしゃくしゃです。『モモ』の物語は皆さんご存知かと思いますが、あらすじをちょっと紹介いたします。

モモという女の子がヨーロッパの古い街にどこからともなくやってきます。生まれてから一度も櫛を入れたことがない、くしゃくしゃの髪の毛をして、裸足で、冬になるとどこかで拾ってきた右と左の揃わない靴を履いて、つぎはぎだらけの洋服を着た女の子です。自分の歳すら分からない。名前だけは「モモ」と言うのですけれども、両親の名前も、生まれたところもわからない、そういう孤児で浮浪児です。現代社会の子どもは戸籍を調べれば分かるのですが、そういうものとは無縁な子どもなので、別な世界から飛んできた子どもと言ってもいいのかもしれない。

現代社会とは面白い社会で、本人よりも紙切れの方を尊重する社会なのです。だいぶ昔のことですけれども、私は家出娘と間違えられて少年課の刑事さんに補導されかけたことがあります。ふらっと出かけてぶらぶら歩いていたら、向こうから2人連れの方

がやってきてじろじろ見るのです。私は、何だろうと思ってすれ違ってから立ち止まって振り返ったら向こうの方も 2 人そろって振り返ったのですが、つかつかと寄ってきて、身分証の提示を求めたのです。私はそのときは身分を証明するものは何も持っていなかったもので、その旨を言ったら、「困りましたね」と言われました。「何の御用ですか」と聞きましたら、警察手帳を出したので、私は驚いて「誰か人をお探しですか」と言いましたら、「ええ、家出された娘さんの捜索願が出されたので、探しているのですが、あなたとそっくりだったものでお声をかけたのです」と言われたのです。私は捜索している娘さんの歳を聞きましたら、私よりも 10 歳も若いということなので、違うことを伝えました。すると、勤務先を聞かれましたので、「なんでしたら、職場に電話をなさって確かめてくださって結構ですよ」と答えました。すると、「それには及びません。あなたの口調を聞いていると学校の先生らしいのが分かります、ただし、これからお出かけになるときは身分証明書をお持ちになった方がいいですよ」と言われました。近代社会とは不思議だなと思いました。私が「私です」と言っても誰も信用してくれないのに、身分証明書などの紙を出すと、納得するのですものね。

『モモ』が身分証明書のようなものを一切持たないということは、現代社会の住民ではないということかもしれません。でも、見たところは 10 歳くらいの女の子ですから、街の人たちは放っておくわけにはいかない。そこで児童施設に入れようとするのですが、モモは「嫌だ、円形劇場の跡に 1 人で暮らしたい」と言うのです。街の人たちは心が広いので、そこにいろいろ手を加えて居心地をよくしてあげると、モモは 1 人暮らしを始めます。ところが、自分の生まれ故郷もわからない、親の名前もわからない、歳もわからないような無知な子どもが大変な才能を持っていました。それは、「人の話をよく聞く」という才能です。モモが大きな真っ黒な瞳を開けて、じっと人の顔を見ると、相手はだんだん自分の心の中を語りたくなっていくのです。これはまさしくカウンセリングの技術です。有名な臨床心理学者で、現在文化庁長官である河合隼雄先生が『モモ』にとっても感激されたので、私は「ああ、河合先生は物語全体よりも、モモの人の話をよく聞くことにしびれたのでしよう」ときくと、「そうだ、こんなに素晴らしいカウンセラーはいないと思って感動したのだ」と言われましたが、まさにカウンセリング的な才能です。

モモの前に立つと、皆いろいろ自分のことを話したくなってきます。そこで、大人たちは困ったことが起こると、モモのところに行く。たとえば、モモの前にやってきて、うまくいかない夫婦関係を話す。何しろ 10 歳の子どもの夫婦関係のもつれを話すなんて変ですけど、話したくなる。話しているうちにだんだん分かっていく。モモの前で長々と話した人たちは、何か一つの回答を得て帰っていくのです。そのような形で街の大人たちからモモは大変頼られるようになりしました。モモはまた、遊びの天才でした。モモと一緒に遊ぶと、とても楽しいので、学校が終わると子どもたちが集まってくるようになりしました。だからモモは、大人から信頼され、子どもから慕われて幸せに生活し始めます。

ところが、ある時から不思議なことが起こります。街の人たちも、子どもたちもほとん

どモモのところにやって来なくなります。そこでモモは一体何が起こったのだろうと、街へ出かけます。すると、街の人たちはめっちゃくちゃに忙しがって暮らしています。たとえば、床屋のフージーさんは、目にも止まらない早業で、お客さんを、次々と椅子に腰掛けさせて髪を洗い、カットして送り出していくので、モモとゆっくり話す暇もないのです。街の人が皆そういう状態で忙しく働いています。一体どういうことが起こったかという、灰色の紳士がやってきて、余分の時間を、時間貯蓄銀行に預けてくださいと勧誘して回っているのです。例えば、床屋のフージーさんのところにやって来て、「私は時間貯蓄銀行から参りました。あなたの無駄な時間をお預かりして、利息をおつけします」と言います。フージーさんは「私は無駄な時間なんか持っていない」と言うと、「あなたは小鳥を飼っていますね、小鳥の世話は役に立つことでしょうか」。フージーさんは、もしかしたら役に立たないのかなと思います。「あなたは病気のお母さんの枕元で1時間くらい雑談をしますね。あれは無駄ではありませんか」。そういわれるとちょっと自信がなくなってきました。「あなたは週末に女友達を訪ねておしゃべりをしますね。あれは無駄ではありませんか」。そう言われると無駄だと思ってしまう。すると、灰色の紳士は「ではその時間を銀行でお預かりします」と言って消えてしまいます。そして翌日から、フージーさんの生活は大きく変わります。小鳥は鳥屋へ返してしまった。お母さんは老人ホームに預けてしまった。女友達を訪ねることはやめた。そして、フージーさんは目が覚めている限りは商売をしているので、とても忙しくなるのです。街中の人たちがそういうことになってしまいました。従って、モモのところを訪ねる余裕はなくなります。子どもたちも忙しくなりました。モモは、学校帰りの子どもたちに会います。子どもたちは「これから別な学校に行くんだ」と言います。放課後も学校に行って勉強する。遊びの学校、体操の学校にも行かなくてはならない。つまり、大人たちが時間を無駄に過ごしてはいけないということを強く感じ、子どもの時間も全部管理してしまったのです。子どもの時間割を全部作ってしまったので、モモのところに遊びに行く暇がなくなってしまったのです。モモは一体これは何事だと思っっているうちに、それが灰色の紳士の仕業で、人間の時間が奪われた結果だということに気づくのです。

ある時、モモはマイスター・ホラというおじいさんに不思議な部屋に導かれて、人間の時間というものを目の当たりにします。小さな池の中の暗い水面から1本の植物がするすると出てくる。見る間にその植物のつぼみがゆっくりと花開く。その花が今までに見たことのないような美しい花である。ところがモモがその花を見つめている間に散ってしまう。あまりにも美しい花があつという間に消えてしまったので、モモは泣きたいような思いになる。ところがすぐにまた新しい茎が伸びてきて、つぼみがついて花が開く、そして散ってしまう、その繰り返しです。そして、先ほどの花と今度の花はいずれも美しいけれど決して同じではない。微妙に違う花が開き散りする。その不思議な光景を目の当たりにしてモモは深く心を打たれる。そしてモモが「これは何か」と聞くと、マイスター・ホラは、「お前の見ているのは人間の時間だ」と言う。「人間の時間ですか」とモモが問うと、「正確に

はお前の時間だ」と言います。つまり、モモの持っている時間が1秒1秒、つぼみから花開く姿で表されているのです。1本の花が散ってしまうと、次に新しい花が出てきて、それも開いて散っていく。それは、どれも大変美しいけれども、決して前と同じではない。つまり、流れ去った時は2度と戻ってはこない。しかし、どの一瞬も美しい。そして、モモは今見ているのはモモの時間であって、他の人は他の人なりに美しい時間を持っていることに気づくのです。モモはこんなに美しい時間を灰色の紳士に預けてしまったのは間違っていると思い、時間を取り戻すために様々な冒険を始めました。やがてモモは、時間がつぼみの形をして凍結されている場面を発見します。モモが凍結小屋の扉を開けると、凍結されていたつぼみが甦って、空を飛んで街へ散らばっていきます。そして街の人々は急に心が温かくなります。とても忙しくて人に語りかけることもしなかった床屋のフージーさんも、なぜか手を止めて無駄話をしたくなります。のんびりとした無駄話をしているうちに本当に心が温かくなってきて、いろいろな人と共に生きることを幸せに思う感情が胸の中に甦ってきます。そして皆は広場に出て、手をつなぎあって肩を組み合い、頬を寄せ合って歌を歌いたくなるという場面で物語は終わります。そしてモモは密かに去って行ってしまいます。

『モモ』は、「時間どろぼうとぬすまれた時間を人間にとりかえしてくれた女の子のふしぎな物語」というサブタイトルが付いています。人間の時間を「モモ」という、別な星からやってきた、頭がくしゃくしゃの浮浪児が取り返して人間を救ってくれた物語になっています。ミヒヤエル・エンデは、今の時代に、このままでいくと人間は時代の歯車に巻き込まれて人間性を失ってしまう。なので、こういう子どもの物語を通して警鐘を鳴らしたのだと、はっきりと言っています。ですから、ミヒヤエル・エンデの『モモ』は、ヨハンナ・シュピーリの『ハイジ』と違って、かなり意図的に作られた物語と言えます。もちろん、児童文学というものはもっと心の底から湧き出てくるものを表現すべきなのに、これは計算づくで作られているので嫌いだと言う方もいます。でも、この物語が象徴的に発信しようとしている時代に対するメッセージは、納得せざるを得ません。モモのような、野生と不潔さというあらゆる文明的なものとは反するものを持つ、もじゃもじゃな子どもが、一つのシンボリカルな意味を付与されて人々を救う。モモは、この文明社会の中にどっぴりつかっていては分からないようなことを見抜く力を持っていました。つまり、人々の心の悩みだけでなく、与えられた時間がかけがえのないものであり、一瞬一瞬貴重なものであって、その一瞬一瞬をいとおしみながら大切に生きなければならない。そして、私が私の一生を大切にするとき、隣の人も自分の一生を大切にする。そして、お互いが美しい時間をいとおしみ、守ろうとする。こんなとき、人同士が手を携えて共に生きていく仲間として愛を確かめあうことができるというメッセージを発信している物語です。ここに現れたモモが、とても素敵で立派な知恵と力に満ちた大人ではなく、くしゃくしゃで、もじゃもじゃな女の子として書かれていたところに、ヨハンナ・シュピーリ以来流れている「もじゃもじゃこそが世の中を救う」という一つの象徴的な意味を見ることができます。もち

ろん、『ハイジ』も『モモ』も、とても可憐な女の子ですから、もっと違う読み方もできます。時代の救世主なんて大げさなことを言わなくても、楽しい読み方をしてもいいのです。でも、彼女たちヒロインが時代の救世主として作品は作られているのだという見方も可能な物語であることも確かです。

今、皆さんが良くご存知の『ハイジ』や『モモ』を挙げましたが、もっと凄まじい「もじゃもじゃ」を紹介いたします。これは古い昔の日本神話に書かれたスサノオノミコトという「もじゃもじゃ」の神様です。スサノオノミコトはとても厄介な神様です。父親のイザナギノミコトから海原を治めるようにと命令を与えられるのに、なかなか命令に従おうとしない。そして、母親のイザナミノミコトが亡くなった時には、母親を恋い慕って、髭がどんどん伸びて胸の先を過ぎるまで、随分長い間泣きわめいていた。結果として、父親に「お前のような者は、この国には住むことはできない」と叱られて追放されてしまうのです。追放されて下界に下る途中で、お姉さんのアマテラスオオミカミと言い争って、お姉さんを大変怒らせてしまう。どうして怒らせてしまうのかというと、生きていた馬の皮を剥いで、お姉さんがタナスヒメノミコトという機織り姫に神々に供える衣を織らせていた時に、そこへ投げ込んだので、タナスヒメノミコトはびっくりして死んでしまった。アマテラスオオミカミが大変怒って、お前のような乱暴な弟を持ったことは非常に困ったことだ、私はこの世にいたくないと言って、^{あまのいわと}天岩戸という洞窟のようなところに入り込んで戸を閉めてしまいます。そこで、世の中が真っ暗になってしまった。アマテラスオオミカミが出てこない、世の中が明るくならないので、神々が工夫して外に引っ張り出します。そして、スサノオノミコトは追放されてしまった。しかしスサノオノミコトは、出雲に降りてきてヤマタノオロチという1年に1回ずつ美しい娘を生贄に求めて食べてしまう、村人から大変恐れられている大蛇を切り殺し大手柄を立てます。大蛇を退治した後、彼は美しいクシナダヒメと結婚して出雲に大きな社を建てて国を治めたという神話です。

出雲朝廷を作った大元が、スサノオノミコトという髭をもじゃもじゃにした乱暴者の神様ですから、これは面白い物語です。父親からお姉さんからも「この世にいてはいけない」と言って追い出されたどうしようもない乱暴者。髭をもじゃもじゃにして、髭も剃らずに泣きわめいているような駄々っ子が新しい国を作ってしまったのです。新しい秩序を作り出すには、そのような「もじゃもじゃ」が必要であるという物語とも言えましょうか。日本の古い神話にもそういう物語が伝わっているということを考えると、この「もじゃもじゃ」はかなり普遍的な象徴です。『もじゃもじゃペーター』に始まったというわけではなく、世界中に広く伝わっていた乱暴者だけでも、新しい何かを起こすシンボルなのではないかと考えられます。日本の神話もそういうものを過去に持っていたということです。

私たちはこうやって考えてみますと、それならばいろいろな物語から、「もじゃもじゃ」を探してみようという想いにかられますでしょう。ですから皆さんも、これからもっとたくさん「もじゃもじゃ」を探して、それぞれのキャラクターが、どのように活躍しているかを追跡することも、本の読み方としては面白いかと思います。さて、その後少し物語

から離れて、もじゃもじゃのシンボリックな意味についてお話ししたいと思います。

Ⅲ 象徴としての「もじゃもじゃ」 — 「もじゃもじゃ」は何を意味するか? —

「ヒッピー」を例にとって

3 番目として、「象徴としての「もじゃもじゃ」 — 「もじゃもじゃ」とは何を意味するか? —」ということを考えてみました。

「もじゃもじゃ」は、なぜ、大人たちから忌避されるのだろうか。不潔? みっともない? それらはいずれも、大人たちの、延いては秩序社会の規範であり、価値の感覚に過ぎない。

「もじゃもじゃ」を巡る子どもと大人の葛藤は、既成の社会的秩序感覚と子どもの自然感覚とのずれを物語るのではないか。ペーターを筆頭とする「もじゃもじゃ」とその物語は、自然のままで生きることを許されず、自分の感性とは無縁に、ただ、ルールに従わねばならない子どもたちが唱える異議申し立てを表現している。「もじゃもじゃ」は、子どもと大人の価値観のずれと、そのゆえに生じる葛藤の象徴ではないだろうか」とレジユメには記しておきました。

先ほども言いましたけれども、「なぜ髪が伸びてはいけけないのだろう」、「髪を洗わなければいけないのだろう」、「なぜ好きなものだけ食べてはいけけないのだろう」。子どもにとっては納得のいかないことかもしれません。大人は説明します。「髪がもじゃもじゃだと汚いでしょう」。でも汚いのは大人の美意識なのです。子どもは汚いと思わないかもしれないのです。それから、「好き嫌いをすると顔が青くなりますよ」とか「体が弱くなりますよ、だからまんべんなく食べなければいけないですよ」と、大人が言う。しかし子どもは経験していないのです。好き嫌いして本当に病気になるか、顔が青くなるか、子どもにはわからないのです。何か怪しげなことを大人は言っているけれど、本当だろうか。大人の説明は、子どもを心から納得させないことがあります。

そして、大人にとっては自分が敷いた路線に子どもが乗ってくれないことは、不安で困ることですし、成長するためにはどうしてもその路線に乗ってくれなければならないという思いがあります。だから「髪はきれいにしましょう」、「爪は切りましょう」、「指しゃぶりはやめさせましょう」と、言うのです。ここに、「もじゃもじゃ」だけではなく、もっといろいろなものに託された子どもの反秩序的感覚、大人の敷いたルールに、そっくり乗りたくないという感覚があります。考えてみると子どもというのは、遅れてきた存在なのです。大人が作ってしまったルールの中に後から入ってくるのです。たとえば、日本に生まれてきた子どもはとにかく日本語を学ばなければならない。これも子どもが選択しているわけではありません。日本人の子どもとして日本に生まれてきた。同じ日本人の子どもでもアメリカで生まれたり、ヨーロッパで生まれたりしたら、また違う言葉や文化の学習の仕方があるのです。でも、日本で生まれたり日本語を学ばなければならない。日本食を食べなければならない。お箸も多少は使えなければならない。半世紀くらい昔でしたら、畳に行儀良く座ることも学ばなければいけない。子どもにとっては、不都合なことがいっぱい

いあります。それは、すべて自分の知らないところで作り上げられたルールであり、秩序の体系なのです。「これにはまらなければいい子になれませんよ」と言われるのは子どもにとって極めて理不尽なことです。でも、それは私たちも子どもの時に理不尽さに耐えながら適応してきたし、また私たちが大人になると子どもたちにそういうルールへの適応を強いて子どもたちをそこにはめ込んでいく、それを繰り返しながら人間の社会は続いてきたのだらうと思います。従って、今子どもである人にとっては、大変不本意で反抗したくなるような事柄がいっぱいある世界に生きています。それを「もじゃもじゃ」の髪の毛で象徴したのだらうと考えられます。先ほどから述べているいくつかの物語を通して、「ああ、そうだな」と思われるかもしれません。そして、子どもたちは「まあ、しょうがないや」と、「もじゃもじゃ」を綺麗にしながら大人になっていくのです。

ところで、面白いことに「もじゃもじゃ」を若者たちが大人になってからあえて主張した時代がありました。これは「ヒッピー」が出現した時代です。ヒッピーとは、アメリカでベトナム戦争に対する反戦運動をしていた大学生たちが学園の中で闘争し、街に溢れ出して、ついにはアメリカの西海岸の方にたどり着いて、テント村を作って自分たちのルールに従った自由な生活を始めたのが最初だといわれています。ヒッピー的な生活を始めた若者たちが、全部とっていからいに「ヒッピースタイル」という、髪を長くして、変わった風俗をしたことが、一つのシンボリカルなスタイルとして全世界に広がっていきました。ところが、いつの間にか時代が移ろい、拡散してヒッピースタイルがいろいろなところに伝わっていくと、ヒッピースタイルが持っていた反戦思想とか、社会に対する異議申し立てという思想的なものが薄くなっていきます。

日本に入ってきた時には、ヒッピーは、思想的なものよりも、風俗的な意味合いの方が強かったといわれています。日本に入ってきたヒッピーは、平和を愛し、戦いを強行する政府に対して異議を申し立てるといような意味合いでなく、既成の秩序の中にはまりきれない若者たちがなんとなくヒッピースタイルをとって、ヒッピー的な歌を作って歌うという、一種のファッションになっていきました。それがどんどん拡散して行って、ファッション性が高まっていくのです。

その証拠に、髪を長くしている若者は、就職試験になると、ちゃんと髪を切り、ヒッピー的な服装をやめてスーツを着るのです。そういうことが簡単に切り替えられるというのは、ああいうスタイルが思想的な何かを象徴するというよりは、一つの流行と化してしまっただけで、社会が注意すればすぐに改めてしまうくらいひ弱なものになっているというのが現在なのです。「もじゃもじゃ」が持っていた象徴的意味合いというものが薄れて行ってなんとなく拡散して一般化している。そして普通のファッションの一部になっています。

IV なぜ、「髪の毛」か——身体の中の髪の毛の特殊性——3点から捉える

ところで、なぜ髪の毛がそんなに象徴的な意味を持つのだらうか、なぜ手や足じゃなくて髪なのかということを考えてみようと思います。

「子どもや若者が既成の秩序に反旗を翻す仕方は、様々にあるであろうに、物語のなかでしばしば「髪の毛」が選ばれる理由を考えてみよう。髪の毛が特に有効に機能する理由は何か、そのことについて、人の身体の中で髪の毛に与えられた特殊な性情を、以下の3点から捉え返してみたい」とレジュメに記し、3つほど挙げてみました。

髪の毛はものすごい生命力の象徴なのです。髪の毛は放っておいても伸び続けます。それから、歳をとると髪は確かに、薄くなったり白くなったりしますが、伸びることをやめたわけではないのです。私も髪が細くなり、少なくなりましたが、伸びないかというところではないので、結局は美容院へ行かなくてはならないのです。髪や爪は非常に生命力が強い。髪は人間の意志の力を超えて生命力を発揮するもの、ある意味では動物的な力を持っているものであり、なんとなくうさんくさいものとして文明からは忌避される傾向があります。人間の身体の中で美しく装うことができる部分ではありますが、極めて動物的なもの、生命的なものとして文明社会からは忌避される傾向があるのです。だから、髪の毛は人間の身体にくっついていれば誰も嫌がりませんが、落ちてると非常に嫌がります。それは人間の理性を拒むような性格を持っているからです。

2番目は、「髪の毛は内と外の境界に位置する」と書きました。髪の毛は不思議です。人間の体の中では確実に自分のものなのです。けれども、切られても痛くないのです。

たとえば混んだ電車の中で、変な男の人がこっそり剃刀で誰かの髪の毛を切ったとします。そうすると、髪の毛を切られた人は大変怒って、時には泣いたりして、警察に訴えたりします。その時は、明らかに髪の毛は自分のものだと思っています。ところが美容院に行くと、切られた髪の毛がその辺に散らばっていても、自分のものだから拾い集めて持って帰ろうとは誰も思わない。だから髪の毛は自分のものでありながら、すぐに外部のものになってしまいます。内側のものでありながら、外のものになるという不思議な性格を持っています。そして、髪の毛は大変目立つところに付いていますから、外部の力や自分の力でも自在に変えることが出来ます。人間の体で、こんなに自由自在に扱えるところはあまりないのです。しかも、それでいて大切にされながら見捨てられるという性格も持っています。

人間の体で、そういうところは少ないです。ですから、髪の毛は権力とか制度が介入します。3番目に「毛髪は制度介入の余地がある」と書きました。ここで、古い歌の一つ二つ思い出してみます。『万葉集』に出てくる歌です。三方沙弥みかたのさみが「たけばぬれ たかねば長き妹が髪 このころ見ぬに 挿入れつらむか」と歌うと、娘子おとめがこう歌い返します「人皆は今長しと たけと言へど 君が見し髪 乱れたりとも」つまり、「もうあなたの髪は長くなったから、きっとしばらくお会いしないうちにあなたは髪を結っていらっしゃるでしょうか」と三方沙弥が問いかけると、「いいえ、周りの人は皆髪を結った方がいいと言うけれど、私はあなたのご覧になったこの髪の毛のままでいます」と娘子が返します。つまり、あなたのお帰りを待っています、という恋の歌です。これは、何もしないでまっすぐに長く伸ばしている髪、これを「放髪はなり」と読みますが、わらべとか特殊な人の髪型なのです。わら

べは子どもですが、古い辞書を読むとわらべとは髪がわらわらと乱れる様と書いてあります。確かにそのわらべ髪、おかっぱは風が吹いたりすると乱れやすいのです。簡単な髪型ですけれど厄介です。これは子どもや、八瀬童子やせのどうじと言い、京都の八瀬地区にいる人たちで、帝が亡くなられた時に先祖代々で棺を担ぐ特殊な職業の人には許されていて、ある一定の年齢になると髪を結わなければならなかったのです。しかも、これはおかしなことに帝が定めた律令制の中にきちんと謳われていたのです。この万葉集の歌は、持統天皇の頃の歌だと言われていますけれども、その少し前から中国から入ってきたいろいろな制度が律令として文章化されていく動きがあります。そして、天武天皇の時代になりますと、飛鳥浄御原令あすかきよみはらりょうという有名な法律が出され、その中に衣服令や結髪令が定められます。衣服の色に対する定めも出てきます。そうすると、髪かみの形と、衣服のデザイン、色でもって、その人の身分、階層というのが一目で分かるようになります。支配者としては非常にコントロールしやすくなります。衣服や色はまだしも、人間の肉体の一部である髪かみの毛まで統制しようとしたのです。つまり、明らかに見える形では、大人と子ども、あるいは身分の高い人と低い人が分かるように仕組まれていました。髪かみの形は、肉体の一部でありながらお上の意向でもって統制することのできるユニークなものでした。

ですから、先の万葉集の歌では、女の人是一定の年齢になって、結婚することができるようになると、皆から髪かみの毛を結いなさいと言われるけれども、あなたと親しかった頃にあなたをご覧になった髪かみのままで私はまだいます、ばらばらして周りの人は嫌がるけれども、あなたのお帰りを待っています、という歌を返しているのです。伊勢物語にも大変よく似た歌があります。「筒井筒つついづつ」という有名なところですが、その中では女の人が「くらべこし 振り分け髪も 肩過ぎぬ 君ならずして たれかあぐべき」と返し歌を歌っています。あなたと昔背比べをしたり、髪かみの長さを比べあったりしたこの振り分け髪かみ（これはおかっぱの髪ですね）、この髪かみも、もう伸びて肩を過ぎました。だけれどもあなたがおいでになって「そろそろ髪かみをあげませんか」と言って下さらない限り、私はこのままお待ちいたします、と愛する人に向けての強い想いを歌ったものです。

いまこうして、古い時代の若い娘たちが、自分の意思を髪かみの長さや結い方に託した歌をみてきました。これは髪かみの毛というものが自分のものであり、いろいろ形作ることができるものでもありながら、権力に介入するものでもあり、権力が大宝律令などの法律の形をとって、結髪令という言葉でもって髪かみを結うことを強制することもできる場所である。それに対してこの娘さんたちは、この統制に密かに抵抗して、周りの人から非難されながらも、髪かみを結うことを先延ばしにしたのでしょう。その人にとっては、自分の肉体だから自分が納得いくまで髪型を変えないという意味を表示するものであり、一方で周りからみれば、強制するものでもあったのです。

これは、大昔のことだけではありません。比較的最近までこういうことが繰り返し起こっていました。明治5年に、違式誣違条例いしきかいじょうれいという軽犯罪法のような法律ができました。その中に「女子は故なくして断髪するを禁ず」という条例があるのです。つまり、女の人

みんな髪を結っていたのです。小さい子どもは別として、一定年齢になると皆が身分階層にあわせて女の人は髪を結び、男の人もまげをつけて、それぞれの制度で定まったような髪形をしていました。ところが、明治維新の文明開化で、一切の古いものが否定された新しい時代がやってきます。男の人に対しては、断髪令が出ます。まげを切りたがらない男の方もたくさんいて、いろいろトラブルもあったようです。男の人はとにかく断髪させられました、そうすると、女の人たちも張り切って断髪する人たちが出てきました。そのため、女の方は「故なくして断髪を禁ず」という法が交付されるのです。

私が所属していたお茶の水女子大学というのは大変古い学校で、今年で創立 130 年になります。明治政府が優れた女性の教員を作ろうと、国立で作った学校で、昔はお茶の水にありまして、女子師範学校と呼ばれた教員養成学校でした。明治 8 年に開学式をしました。向学心に燃えた女の人たちが、全国から集まってきました。その女の人たちは大変はりきって、すべて男並みにやろうとしていたのです。お茶の水のあたりに、髪を切って袴をはいた凄まじい女の人が歩いているからというので、そのような女の人たちに対して政府は大変不安を感じ、良俗を乱すということで、「女は勝手に髪を切ってはならない」という御触れを出すことになったのでしょ

う。断髪令は、病気で髪の毛を結ったり洗ったりすることが大変な人や、歳をとって、重たいまげを付けているのが大変という理由があれば切ってもよかったです。しかし、普通の人は切ってはいけなかったのです。ですけれども、いつの間にかこの条例はなしくずしになってしまって、女の人たちは密やかな抵抗として、髪を切ったり、洋髪にしたりしました。明治の初めですから、百何十年以上前には、お上が女性を髪でコントロールしていたので、髪というのはそれだけの力を持っていたのです。

それから、現代、校則で髪を自由にしてはいけないとしている学校がたくさんあります。それで、生徒とトラブルを起こしたという学校もあります。髪の毛は、普通に自由に生きたいという人の想いと、権力でもってコントロールしようとするお上の意思との間に葛藤を生じさせる象徴的な存在であったと言えます。

V 結びに代えて——「もじゃもじゃ」不在の現代

このように髪の毛は大変面白いシンボリックな性格を持っています。ここで、一つ考えてみたいのは、こういう「もじゃもじゃ」であったり、結い方であったり、さまざまに自分の自由な意思を表示するシンボルであった髪は、今はそのような機能を発揮しなくなりました。日本のような先進国では、「ちゃんとしなければだめですよ」と言われると、「はい」と言って、髪を切って、シャンプーも毎日して、清潔で「もじゃもじゃ」ではない子どもたちが増えています。若者たちもファッションとしていろいろやってみるけれども、いざとなればちゃんと髪を切り、就職試験に行くのです。これは一体何でしょう。

つまり、子どもや若者が、大人の決めた秩序、体制、お上の決めたいろいろなルールに対して本気で反抗しようとする精神を持たなくなったのです。今の子どもは反抗期がない

と言われます。これは、大人と子どもの葛藤がなくなったという意味で結構なことですが、人の育ちという点から考えると必ずしも結構とは言えないかもしれません。やはり、反抗して自分を作っていくという形で山を越えなかった子どもたちは、結局は自分の気に入らない社会に対して、戦って変えていこうとしないで閉じこもってしまうのです。引きこもりは、もしかしたら典型的な「非「もじゃもじゃ」的」子どもの成長の姿かと思えます。もじゃもじゃした髪の毛は、これまでさまざまな事柄を象徴し続けてきた。最後に、子どもの本の世界には、探してみるともっと面白い「もじゃもじゃ」がいて、それを発見して読み直してみる面白さも提供してくれるのだということを申し上げまして、ここで終わらせていただきます。どうもありがとうございました。